

[チーフ報告] 白金校舎学生スタッフ活動報告

1、白金学生スタッフとは

自らがボランティア活動に参加するだけでなく、ボランティア活動を通して、学生にボランティアの楽しさ、魅力を伝えたり、人と人をつなぐ——つまり人と人の架け橋になることを活動目標とし、私たち学生スタッフ（以下学生スタッフ）は現在進行中の6つのプロジェクトに所属し、活動をしている。

2、今年度を振り返って

2010年の学生スタッフの活動は、実りの多いさらに発展した年であり、学生スタッフの「人と人の架け橋になる」という目的を実感した年であったと思う。それは、プロジェクトごとの活動が活発で、それが学生スタッフ全体の活性化につながったことに表れている。

私がボランティアセンターに関わり始めた2009年は、既にプロジェクトは確立されていてそれぞれの活動が行われていた。先輩方が考えた学生スタッフが目標とすることなど、基本的なスタンスは普遍化していたので、私はそれを受け継ぎ、絶やさないように長く続けていくこと、ボランティアセンターに関わり始めたばかりの人がコミットしやすいように、声をかけることをチーフとしての活動目標とした。それは、活動を細く長く続けていくことに意味があると思ったからであり、またボランティアセンターの学生スタッフは学部・学年は関係ないとはいえ、3年の私は先輩として後輩のサポートをする立場にあり、それが思いをつなげていく秘訣だと思ったからである。

4月は残念ながら新スタッフを迎えることはできなかったが、その後、普段各プロジェクトに関わっている人に声をかけ、勧誘企画を行ったところ新スタッフに登録してくれる人がいた。その中には、学生スタッフでは3人目となる横浜校舎在籍のメンバーもいて、白金学生スタッフは校地の違いという距離の垣根を越えた団体になってきていると思う。そして、普段の地道な活動が人と人とのつながりを広め、そして深くなっていくことを実感した。

また、2010年度は、新しいプロジェクト（山黒、報告書41～42ページ参照）が立ち上がり、より一層活動の幅が広がった。各プロジェクトも常に動いている状態でイベントが盛りだくさんであった。春学期の活動報告と秋学期の活動予定を各プロジェクトでプレゼンする夏合宿では、秋学期に予定される各プロジェクトの企画の多さに、また新しい試みが始まるのだという期待もあったが、果たして成し遂げられるのだろうかという不安もあった。しかし、準備が進む中でそれぞれが大変な時も、困ったことがあれば誰かが助けてくれた。学生スタッフで問題視されているプロジェクト間の横の連携についても、今年度はそれぞれのプロジェクトのイベントの協力を呼びかけると多くの学生スタッフが参加してくれたことが本当に大きな収穫であり、学生スタッフ全体での一体感を生み出したのだと思う。また、全体での定例ミーティングがない白金学生スタッフの活動は、全体の企画である9月の夏合宿と2月の研修会（詳細は報告書29～30ページ参照）が非常に重要である。夏合宿を通して、各プロジェクトの活動予定をそれぞれが把握し合ったことがイベントの活性化につながったのだと思う。

そして、もう一つの学生スタッフ全体の企画であり、お世話になっている方々への感謝の意を示す「白金合コン（詳細は報告書27～28ページ参照）」の際には、各プロジェクトを始め日頃白金ボランティアセンターにご理解、ご協力いただいている地域の方々や教職員の方々の温かさを改めて感じた。多くの方が集まり、学生の活動に興味を持っていただき、温かい言葉をかけていただく・・・、そんな経験は普段の大学生活ではなかなかないことだと思う。地域の方々の学生に対する期待を感じ、普段のひたすらにがむしゃらな活動を振り返り、さらに頑張ろうと思える機会であった。地道でがむしゃらな活動が信頼関係を築き、「人と人のつながり」を生み、「人と人の架け橋」になることができたイベントであったと思う。これからも「つながり」の大切さを感じ、活動を続けていければと思う。

私が考える学生スタッフの魅力は、様々な分野に特化するプロジェクトが進行している為、コミットすることで自分自身のフィールドをどんどん広げることが可能なこと、それを通じて様々な経験ができること、様々な人と出会えることである。「ちょっとしたきっかけで、ふらっと立ち寄ったボランティアセンターでこんなに多くの刺激を得た、楽しさを発見した。」という、きちんとした型にはまらない活動ができるのが魅力だと思う。そして多くの経験を積み、様々な分野に精通する方々と出会い、多様な考え方を吸収できたことが私自身の成長にもつながった。ボランティアセンターで頑張っている学生スタッフの姿を見ると、「私もまだまだ頑張ろう！」と思えたこと、そんな仲間をもてたことに感謝している。

私がチーフとして行ってきたことで特記すべきことはない。もちろん、それぞれのプロジェクトの把握をしようと心がけ、それが役割であることは自覚しているが、各プロジェクトが成果を生んだのは、紛れもなく学生スタッフ一人一人の頑張りである。「一人一人がコミュニケーションを図り、困ったことがあれば助けを求める。」ということは、簡単そうに思えて、意外と難しい。だからこそ重要かつ、必須事項である。学生スタッフ一人一人が責任を持ち、これからも実行していくべき点である。「困ったことがあれば、必ず誰かが助けてくれるし、自分も困っている人がいれば助ける。」そういった環境であることが普段の活動の安心感であったり、さらなる向上心につながっているのだと思う。また、多くの人が集まって何かを生み出すことは、苦労も伴うが、楽しさややりがいは無限に広がるものだと思う。それらを覚えることができた環境に感謝し、人への思いやりを忘れずに一生懸命に活動していきたい。

3、 今度の展望

今後は、活動をつなげていくためにも新スタッフの勧誘が非常に重要である。校地の違いで1・2年生を勧誘しづらい状況ではあるが、だからこそ私たちの活動に本当に興味を持ってくれた学生が集まるのだと思うし、それがボランティアセンターで行われている活動らしさだと思う。ふとしたきっかけ、人との出会いを大切にしていきたい。今、置かれている環境に合わせて運営方法を変え、常に窓口の広い団体であること、決まりきったことよりも「人と人の架け橋」になることを目的に、これまでに築いた「つながり」を活かし、さらに発展した活動をしていくことがあるべき姿だと思う。また、学内外問わず、あらゆる可能性を追求することを止めない団体でありたい。（心理学部心理学科3年 齊藤 瞳）

[チーフ報告] 白金合コン 2010

【白金合コンとは?】

白金合コンとは、地域の方々と白金学生スタッフ、ボランティアセンターをはじめとした本学教職員が交流を通して「つながりの輪」を広げていくことを目的として行う交流会だ。また、普段はプロジェクト毎に別々に活動している学生たちが協働して準備及び実行することができるイベントでもある。

【合コン開催に至った理由】

昨年が好評だったため、2010年も白金合コンを開催することが考えられていた。そして9月の研修会で、改めて白金合コンの開催について話し合った。昨年の反省や今後の活動を考えた結果、「交流を通して『つながりの輪』を広げること」と「ボランティアセンターの活動に関わる地域の方々に、私たちの感謝の気持ちを伝えること」をテーマに、白金合コン 2010の開催が決まった。

【合コン開催日まで】

準備はまず企画書の作成から始まった。合コンの最終的な形をイメージしながら、9月に行った研修会中の話し合いで提案されたアイデアをまとめ企画書とした。合コンは、1. ボランティアセンター及び学生スタッフについての説明、2. グループワーク（白金学生スタッフオリジナルのカードゲームを使ったアイスブレイキングとワールド・カフェ方式のグループディスカッション）、3. 懇親会（カレーパーティ）という構成となった。企画書の作成後は参加者を把握する作業を始めた。企画書作成の段階で参加予定者としてリストアップした「ボランティアセンターの活動に関わる地域の方々」に招待状を送り出欠の程を伺った。最終的には50名程の方が参加して下さることになり、改めて合コンの開催は責任あることなのだと思った。しかし同時に、たくさんの方に集っていただけることが嬉しく、合コンを成功させたいという思いが強くなった。出欠の返事を待っている間、グループワークと懇親会を中心に残りの準備を進めた。これらの準備もとても大変だった。特にアイスブレイキングに使うカードゲームの準備は、うまく段取りをすることが出来ずギリギリまで準備に時間を費やした。そして、準備が不十分なところもあった。そのため合コンが始まってからもとても緊張した。

【合コンの当日】

この日は時間のある学生が、昼ごろから集まって当日準備を始めた。懇親会で振舞う予定の軽食の準備や会場の設営などを、少ない人数で頑張った。それでも学生スタッフ各人の能力の高さに救われ、何とか間に合わせることが出来た。合コンは予定より少し遅れてスタートした。会場は予想していたより早くから人が集まったため、知り合い同士のお喋りで少し賑わっていた。しかしボランティアセンター

及び学生スタッフについての説明が始まると、会場は静まりかえり皆真剣に説明に耳を傾けてくださった。集まってくださった地域の方々が、こうして真剣な気持ちで合コンに参加して下さっていると思うとより緊張した。説明が終わり、会場は静かなままグループワークに移った。まずアイスブレイキングとして、学生手作りのカードを用いたカードゲームを行った。これは、ドイツのカードゲームを参考に作ったもので、ゲームを通して白金学生スタッフが行っている6つのプロジェクトについて知ることができ、参加者たちも互いの名前を呼び合うことで打ち解けられる仕組みになっている。今回は時間の都合により、5人の学生と5人の地域の方で二人一組のペアを作り、ペア対抗でゲームを楽しんだ。そして、残りの人は周囲に集まって声援を送って頂いた。一部の方にしかカードゲームを体験して頂けなかったのは残念だったが、会場は予想を上回る盛り上がりを見せた。会場の緊張が十分にほぐれたところで次のグループワークに移った。普段は地域の方と学生・大学とが一堂に会することは滅多にないので、この機会を活かして、今後の私たちの活動につながる企画として、「地域と学生と大学の三者協働・コラボレーションについて」というテーマで、ワールド・カフェという手法を用いてグループディスカッションを行った。八つのテーブルに分かれてそれぞれ熱く議論を繰り広げ、様々な意見を交換しあった。今後の活動につなげるためにも、アンケート用紙を配布し、ディスカッションの内容や感じたことを集計した。懇親会では、学生たちが「一つ一つの具材がカレーを良いものにするように、私たちも一人ひとりが地域を良いものにしていく」という思いを込めて作ったカレーをメインに軽食を振る舞い、食事しながら会話を楽しんでいただいた。食材は、昨年続き、今年もセカンドハーベスト・ジャパンよりカレールーを提供していただいた。その他今年度新たにつながりができたNPO法人ばれっとのケーキや田舎会社東京支店の野菜を購入した。会場はとても盛り上がり、学生たちも合コンに集まっていた地域の方々と新たに交流を結ぶことができた。

【合コン後のつながり】

昨年は合コン後に、参加していただいた地域の方々にフォトアルバムと寄せ書きを贈った。今年は、昨年贈ったフォトアルバムが埋まるよう写真とメッセージを送る予定であり、改めて感謝の気持ちを伝えることができればと思う。

【感想・反省】

企画の運営は思っていた以上にずっと大変な仕事だった。今年度から学生スタッフに登録した私にとって初めてのマネジメント活動であったが、仕事に慣れていないためか、作業が予定よりも遅くなることもしばしばあった。そのことで学生スタッフの仲間やボランティアセンターの職員の方々に多くの迷惑をかけてしまった。学生スタッフの活動における基本である、「ハウレンソウ（報告・連絡・相談）」の徹底を心がけ、今後につなげていきたい。

（法学部法律学科3年 須田秀語）

[チーフ報告] 合宿・研修会

【はじめに】

私たち学生スタッフは、主に白金ボラセンの6つのプロジェクト（以下PJ）にそれぞれ所属し、「人と人をつなぐ架け橋」としてプロジェクトのマネジメントや情報発信などの役割を担っている。しかし「架け橋」となるには自分が所属するPJについてはもちろん、各PJの活動状況や知識を人に“伝える”力が必須となる。そのため、私たちは学期に一度研修会を開いて他PJの状況を把握し、共に問題解決を図ったり、学生スタッフイベントの企画立案を行ったりしている。このような情報共有を通して、学生スタッフ同士のつながりを深め、活動活性化のための協力態勢を築くことも、研修会の大きな目的である。9月は合宿、2月は日帰りの形態で行う。なお、本稿執筆時は2月の研修会前であるため、9月の合宿について報告する。

【2010年度9月研修会（以下合宿）】

2010年9月20日から22日まで、川崎市民プラザにて行われ、14名の学生スタッフと5名のPJメンバー、3名のOBが参加した。合宿ではスタッフ同士に留まらず、スポット参加者や学生スタッフではないPJメンバー、学生スタッフOB・OG、ボラセン教職員や外部講師の方とも交流を深め、つながりを再構築することを目指した。そこで合宿のタイムスケジュールやメンバーの自己紹介シートを盛り込んだ「合宿のしおり」を制作・配布し、交流の活性化に利用してもらえよう工夫した。さらに、参加学生共通の「おもしろいものをひろう」という目標を設定した。一見自分からは遠く感じられるような話にも自分にとっての「おもしろいもの」は埋まっている。この合宿を通してそれを沢山見つけられるように、常にアンテナを張って臨んでほしいと考えたからである。

1日目のコンテンツはボラセン教職員と外部講師による講演であった。今年度よりボランティアセンター長に就任された原田先生、ボランティアコーディネーター李さん、富士通株式会社、NPOサポートセンター・アドバイザーの長浜洋二さんに講師をお願いし、ご自身の専門分野と学生によるプロジェクト運営を絡めたお話を頂いた。また、学生スタッフチーフを務める齊藤瞳が、学生スタッフ全体の春学期の活動とその課題について総括した。原田先生からは、「伝え方」の極意——「面白く」「共感（感動）してもらえること」について学び、人に「伝える」ことを硬く難しく考えていたことに気付いた。今後、様々な方にPJ活動について知って頂けるチャンスを生かせるよう、原田先生から頂いたヒントを用いて、伝える力を磨いていきたいと思う。李さんの講演では、病院での暮らしを余儀なくされている長期入院児たちの話を通して、病棟や施設のような閉ざされた環境にある方たちとの関わりについて知ることができた。普段人に何かをしてもらうことが多い子供たちにとって、「自分が人に何かしてあげる喜び」を味わってもらうような遊びを考案したり、立場や垣根を越えて“みんな”楽しむためのアプローチを学ぶことができた。ゲスト講師の長浜さんからは、「かいぜん」の5カ条を学び、社会で活躍す

る企業がどのような方法で目標に向かって突き進んでいるのかを垣間見ることができた。チームで定めた目標に向けて、限りある時間でいかに価値（人に喜んでもらうこと）を生み出すかということ、目標達成のためには不必要なことを徹底的に排除し、毎日の行動を見直すということを教えて頂いた。

2日目は、6PJがプレゼンテーションを行った。1PJ60分間という限られた時間で、春学期の活動・秋学期の展望をプレゼンし、ワークを通して問題点の改善案や企画でのアイデアを募った。これを通して自分の活動に熱心になるあまり、埋もれてしまった活動の大切な目的、気付かなかった仲間の存在を改めて認識できた。また、場数を踏んで成長したプレゼンの技術や活動自体の魅力も、互いにより刺激をもたらし、共に成長していける基盤を構築できたのではないと思う。スポット参加者は、話合いやワークの中で、学生スタッフが考え付かない斬新なアイデアや、素朴な疑問などを積極的に投げかけてくれて、とても参考になった。PJ発表後のセンター長補佐の浅川先生の講演では、文化人類学の観点から、「贈与と返礼」のお話をして頂いた。ある民族のクラという習慣に見られる、一見すると無意味にも思える「贈与と返礼」の繰り返し。しかし、この不思議な習慣は実は私たちの身の回りにも、PJ活動の中にもありふれているものだと気付いた。私は、浅川先生が仰った「贈与と返礼を続けると人は生きていけない」という言葉がとても印象的であった。

1日目と2日目の夜は、交流を兼ねた夕食会が行われた。初日より打ち解けた雰囲気でも盛り上がった2日目の交流会は、学生スタッフもPJメンバーも違いがわからないほどに積極的な交流が見られた。ご講演頂いた講師の方々に詳しいお話を伺うこともでき、よりつながりが深まったのではないと思う。

3日目は学生スタッフ企画・「白金合コン2010」の企画立案を行った。今年2回目を迎える白金合コンであるが、前回の反省とアンケートを基に「参加者がより密に交流できる会にすること」を目標にアイデアを出し合った。その後、ボラセン職員古坂さんからボラセンHPの現状と活動ニュースなどの日々の情報発信の大切さについて教えていただいた。

【合宿を振り返って】

4人の方の講演、6PJのプレゼン、企画や交流会など、とにかく盛りだくさんの2泊3日であった。その他にも、OBスタッフから伺ったこれまでの歩み、眠い目をこすりながら輪になって話した夜の振り返りなど、本稿に全て書ききれないがとても貴重で濃い時間を過ごせたと感じる。夜の振り返りでは、初参加のスタッフから、講演やプレゼンで人の話に耳を傾けることや自分から発信することを通して、この3日間だけでも自身の成長を実感したという感想が挙がった。合宿後に参加学生が提出したレポートでは、活動の中でひとり抱え込んでしまっていたことをスタッフと共有でき、気持ちが楽になったと書いた学生スタッフもいた。以上のように今回の合宿を通して、私たち白金学生スタッフらは自分の周りには、一緒に頑張る仲間やそれを見守って下さる教職員の方々、OBの皆さんがいるということのを再認識でき、合宿が秋学期に向けて新しいスタートを切るための踏み台となったのではないと思う。

(心理学部心理学科2年 櫻井仁美)

[プロジェクト報告] しろかねサラダ (旧志田町倶楽部学生チーム)

【はじめに】

私たちは、「明治学院大学のある白金という街で明治学院大学の学生だからこそできる活動をしたい」と思った学生有志が集まったプロジェクトチームである。私たちは、白金の街に住む人、働きに来ている人、勉強に来ている人など、出会いのある全ての人々の縁とつながりを大切に活動をしたと考えている。また、明治学院大学は校地が2か所（白金・横浜）あるが、本プロジェクトには校地に関係なく学生や教職員が関わっており、「明治学院大学をつなぐ」も大切にしている。私たちの活動は2008年4月に白金志田町倶楽部の活動に参加したご縁で、白金高輪駅周辺地域から始まり「白金志田町倶楽部学生チーム」として活動してきた（詳細は2008年度、2009年度報告書参照）。一方で同時期に「港区青少年対策高松地区委員会」の活動や、「ふれあい運動会実行委員会」への関わりも始まり、白金台・高輪台駅周辺地域での活動にも参加してきた。こうして「白金」と呼ばれる地域の方々とのつながりが年々広がったことで、このたび「しろかねサラダ」というチーム名で新たに生まれ変わる事となった。この名前は、白金と呼ばれる街全体の中で、住民の方々だけではなく明治学院大学の学生や教職員など、仕事や勉強に関わりのある人々や団体などを様々な持ち味の個性的な「具」が白金地域というサラダボールに集ったり主張したり混ざり合う「サラダ」に見立てている。私たちはチーム名を一新したことによりこのような白金の「サラダ」の魅力を発信して多くの人に伝えていきたいと考えている。

【活動報告】

2010年度は地域主催のイベントへの参加の他、学生主催の企画も実現することができた。以下、時系列に沿って説明していく。

毎年4月29日に白金小学校において、ふれあい運動会実行委員会主催のふれあい運動会が開催されている。地域の大人や子どもが500名以上参加する大規模なイベントで、本学の学生は毎年参加しており、今年度もラジオ体操の手本や競技説明を担当させていただいた。昼食会を兼ねた懇親会では白金台地域に関わっている様々な立場の方と交流することができた。このように地域に住む人々が老若男女関係なく交われる場所があることを知り、この行事が四半世紀も続いていることに地域の力を感じ、またそこに私たち学生が関わられることを嬉しく思う。

5月15日、16日には白金地域で開催されたシロカネグローバルフェスタ2010（以下グローバルフェスタ）に参加した。今年度は当日参加する本学の学生ボランティアのリクルートとマネジメント、事前準備に加え、白金志田町倶楽部が主催するウォークラリー企画の台紙案を学生が担当するという参加企画が実現した。今年も多くの学生がボランティアとして参加してくれ、しろかねサラダのメンバー獲得にもつながった。そして去年に引き続き、白金学生スタッフのプロジェクト「MGパール（詳細は〇〇ページ参照）」がブース出店し、地域に向けて本学の学生の活動を広める機会となった。さらに、今年は本学の学生有志でステージに出演させていただいた。普段白金と呼ばれる地域で活躍する学生が、それぞ

れの活動を通じて感じた地域への思いを語り、自分たちの白金という地域への思いを観客である来場者や地域の方と共有し、私たちにとってとても意味のある初めての試みとなった。このステージは、今年でフェスタへの参加が3年目となり、今まで築いてきた信頼関係があったからこそ実現したのだと思っている。

また、グローバルフェスタに向け、「白金をもっと深く知ってもらいたい」という思いから白金の隠れた魅力を発信するガイドマップ「白金 Deep Map（以下、Deep Map）」を作成し、フェスタ当日に来場者に配布した。さらに、この企画でボランティアファンド学生チャレンジ賞に応募し、助成金をいただいた（詳細は報告書82～83ページを参照）。また、今回北里大学や東京農業大学の学生も参加しており、他大学とのつながりもできたので、今後何らかの形で関わることができたらと思う。その他、白金志田町倶楽部主催の防犯パトロール、JAZZ ライブに定期的に参加している。8月は港区と港区青少年対策高松地区委員会が共催するみなとキャンプ村に参加し、白金の小学校に通う小学生と一緒に山梨へ行った。3日間という短い期間ながらも自然の中で子どもたちと遊び、普段接点のない地域の子もたちとの距離を縮めることができたと思う。行き帰りのバス内でのレクレーションを任せていただき、ただの単発ボランティアとしてではなく、スタッフの一員として見てくれているのだという実感を持てた。

2011年1月現在、Deep Map 第二号の制作中であり、発行は2011年3月を予定している。2月には港区青少年対策高松地区委員会主催のいちご狩りのイベントがあり、メンバーが中心になってバス内でのレクレーションや自由時間の企画立案および実施を担当する。

【成果と反省】

これまでは地域でもともに行っている活動に私たちが参加するという形が多かったが、今年度はステージ出演やDeep Mapの創刊といった、「明治学院大学の学生だからこそできる活動」が多く実現した実りのある年となった。また、地域との関わりも3年目となり、継続して関わっていくことが地域とのつながりを深めるということを実感した。反省としては、特定のメンバーに役割が偏ってしまった点、両校地にメンバーがいるため、なかなか全体で集まることができず情報共有不足となった点が挙げられる。今後はメーリングリストを積極的に活用し、情報共有を徹底していきたい。

【今後の目標】

これまでよりも活動範囲が広がったことで、イベントや企画の可能性の幅も広がったので、今まで以上に私たちのカラーを打ち出していけるような活動をしていきたい。そのために自分たちが白金という地域を楽しみながら関わることを大切にしながら、地域の魅力を発信していこうと思う。そして、地域の方だけでなく地域活動に関わったことのない学生にも白金という地域で活動する楽しさ、魅力を知ってもらい、気軽に白金の街を歩いてもらえるような工夫をしていきたい。また、興味を持ってくれた学生を今後の活動に巻き込んでいき、地域の方々と一緒に白金の街を盛り上げていきたいと考えている。

（心理学部心理学科3年 本間由香）

[プロジェクト報告] MG パール

【はじめに】

私たち MG パールは、ボルネオ島での森林伐採やアブラヤシのプランテーション開発のため住み処を追われている野生動物を保全するために活動している、NPO 法人ボルネオ保全トラストジャパン（以下、BCT ジャパン）と、明治学院大学ボランティアセンターとの三者協働で、「パールビーズの森プロジェクト」を実施しています（プロジェクトの詳細は 2008、2009 年度報告書を参照）。このプロジェクトは白金・横浜の両校舎で展開していて、地域のお祭りや学内イベントでのパールビーズアクセサリー販売活動を通じて、ボルネオ島と私たちの生活が密接に関わっていることを多くの人に知ってもらうことを目的としています。

【活動報告】

本年度は、段々と知名度が上がってきた MG パールをもっといろんな人に伝える機会や、私たち自身も、もっとボルネオ島のことを知る機会を与えていただきました。具体的には、白金台地域で開催された「ふれあい運動会」や、白金小学校 PTA 主催のおまつりへの参加、そして、白金小学校のお母さん方との交流会などを通じて、白金地域の方々や、白金校舎からすぐ近くの白金小学校のお母さん方に MG パールのことを知っていただいたり、お母さん方を通じて子供たちとも交流することができました。5 月には、毎年恒例となりつつあるシロカネ・グローバルフェスタに出店し、二日間で多くの方にご来店いただきました。また 10 月には港区芝公園で開催された「みなと区民まつり」に初出店させていただきました。どちらのイベントでも、プロジェクトの趣旨を丁寧に説明しながら商品を販売することで、地域の方々に MG パールを知ってもらえるよい機会となりました。また、白金校舎に BCT ジャパン理事長の坪内俊憲さんをお招きして講演会を開催し、貴重なお話をたくさんお聞きすることもできました。そして今年度初めて、たくさんの方の協力のもと、「ボルネオスタディーツアー」が実施され、10 名の学生が参加しました。プロジェクト発足当時から、私たちの今までの活動の収益などで「緑の回廊」として、オランウータンたちのために購入した森である、「パールの森ミニ」を見に行きたいという思いがあったのですが、プロジェクト発足から三年目にしてついに、現地ボルネオに行くことができました。現地では、野生のオランウータンに遭遇したり、念願の「パールの森ミニ」を見ることができたり、地元の方々に MG パールの活動を紹介したり、実際に現地の女性たちと一緒にアクセサリーの製作を行いました。自分の足でボルネオに行き、自分の目でボルネオを見ることができたことは参加した学生一人一人に大きな影響を与え、私たちが MG パールの一員として、地球に住む生物の一員として考え、MG パールの活動の意義を改めて感じることができました。来年以降もスタディーツアーを通じて多くの学生がボルネオ島を訪れ、ボルネオ島の現状を知ってほしいと思います。そして今年で 3 回目となる「ジャングルクリスマスフェスタ in 白金 2010」を開催しました。スタディーツアーの報告会や、スタディーツアー中に体験した朝と夜のリパークルーズを再現した「ジャングルクルーズ」、実際にボルネオ

で録音した森の音をBGMに森や動物たちをイメージしながら行う「森ヨガ」など、実際にボルネオに行ったからこそ企画することのできた企画をスタディーツアーに参加したメンバーが中心となって実施しました。企画から参加した学生からは、「初めてイベントを企画する側に立って、イベント運営の難しさや、他者にMGパールのプロジェクトを理解してもらうことの難しさも感じたが、その課題は来年に生かしたい」といった感想がありました。企画の内容は昨年度よりも充実したものになったと思いますが、来年度はもっと広報に力を入れて、集客数を上げていけたらと考えています。また、今年度の活動を通じたパールビーズアクセサリーの売上は102,600円、募金額は51,300円となり、2008年度からの総獲得森面積は842.5㎡となりました。詳しくは下記の表をご覧ください。

表 MG パール 2010 年度活動内容

| 活動日程 | 活動内容 | 売上明細(販売を行っていない場合は空欄) | 募金額(売上の半額) |
|------------------|-------------------------------------------|-----------------------------------|----------------------|
| 4月20日(火) | アクセサリー製作講習会@白金校舎 | | |
| 4月29日(木) | ふれあい運動会 | 1200円×9 | 5400円 |
| 5月15日(土)・16日(日) | シロカネグローバルフェスタ | 1200円×22、600円×42、ワークショップ(1200円)×2 | 27000円 |
| 6月18日(金) | 坪内さんの講演会@白金 | 1200円×6 | 3600円 |
| 7月4日(土) | 白金小学校PTAのお祭り | | |
| 8月30日(月)～9月6日(月) | ボルネオ島スタディーツアー | | |
| 10月2日(日) | スタディーツアープレゼン@ザ・プリティッシュ・スクール・イン東京(渋谷キャンパス) | | |
| 10月10日(日) | みなと区民まつり | 1200円×5、600円×13 | 6900円 |
| 10月17日(日) | 白金小学校のお母さん方との交流会 | | |
| 11月11日(木) | ジャングルクリスマス打ち合わせ@BCT | | |
| 11月12日(金) | ボルネオミニ報告会@横浜校舎 | | |
| 11月15日(月) | ボルネオミニ報告会@白金校舎 | | |
| 11月5日(金)～15日(月) | アジア文化祭での写真展示会@横浜校舎 | | |
| 11月28日(日) | ぱれ☆コレ2010(詳細は報告書●ページ参照)へのアクセサリーの提供と参加 | | |
| 12月18日(土) | ジャングルクリスマスフェスタin白金2010 | 600円×24、ワークショップ(1200円)×2 | 8400円 |
| | | | 合計51300円(森の面積427.5㎡) |

【成果・反省】

今年度は、4月から7月はスタディーツアーに向けて、9月から12月はジャングルクリスマスに向けて活動していくという明確な目標があったことで、学生たちも向上心と意欲を持って活動に参加できたと思います。また、白金ボラセンのプロジェクトの横のつながりも密になったことで、ぱれ☆コレ2010に参加したり、ジャングルクリスマスフェスタに、他のプロジェクトに参加している学生スタッフが大勢関わってくれました。ジャングルクリスマスフェスタも、昨年度よりコンテンツ内容は充実していたと思います。しかし、両校舎で行っているプロジェクトであることもあり、なかなかメンバー全員が集まれる時間を作れなかったこと、ジャングルクリスマスフェスタに向けて、個人プレーの集まりのような形になってしまい、仕事を分散できず一人ひとりが抱え込む形になってしまったことが大きな反省点です。そして来年度は引き続き、両校舎で活動できるプロジェクトとして、大学生活を通じて継続して関わっていけるメンバーを増やし、メンバーが集まれる機会を作り、来年度のジャングルクリスマスに向けては、集客数を上げていくために綿密な計画を早い時期からBCT ジャパン、ボランティアセンターとともに練っていけたらより一層深みのあるプロジェクトになっていけると考えています。また今年作ることのできた地域や他団体との繋がりは来年度も継続して大切にしていきたいと思っています。

(国際学部 国際学科3年 北原美奏)

【プロジェクト報告】 MG ☆ SUZU

【はじめに】

MG ☆ SUZU（以下SUZU）は、「アートでキャッチボール」をコンセプトに特別養護老人ホームの利用者さんとアート作品の製作を通じた交流を行っている。現在、白金校舎から徒歩15分の場所にある港区立特別養護老人ホーム白金の森（以下、白金の森）という施設を中心に活動している。私たちはアートをひとつのコミュニケーションツールと考え、そこから生まれる会話やつながりを大切にしている。出来上がった作品からは、その方の人柄やこだわりが感じられ、私たちがより深く利用者さんを理解することにつながっている。SUZUの活動を利用者さんに楽しんで頂き利用者さんのご家族、施設職員の皆さんにとっても利用者さんの新たな魅力を発見する手助けになれば幸いである。また広く一般の方々にも利用者さんの魅力あふれる作品を観て頂きたいと考え展示会も行っている。

【活動報告】

昨年度、メンバーの増員に伴い、出来ることが増えた一方で、見えにくくなったものもあった。それは「今後どういったことを目指すのか」「SUZUにしかできないこととは何か」ということだった。これらを再確認しSUZU自体が成長するために、2009年度秋、社会福祉法人福祉プラザさくら川での活動を休止し、充電期間を設けた。充電期間であった2009年度1月から本稿執筆時期である2010年度1月現在までに行われた主な活動は表1の通りである。

充電期間中を有効活用し、アートのアイデアを集めようと、1月にフランス大使館で行われた“*No Man's Land*”に出かけた。70人のアーティストによる大胆かつ自由奔放なこの展示会を通じて、自分たちの思う“アート”がいかに既成の概念に囚われていたかということやアートの無限大の可能性を再発見した。8月にも、「借りぐらしのアリエッティ×種田陽平展」と「生きのびるためのアート日韓合同展」を観覧し、見ている人を楽しませる空間の見せ方や様々な展示方法を学ぶことができた。

2月、私たちは白金の森で再スタートを切ることとなった。まず利用者さんとの交流から始めようと、お散歩や施設主催の回想法の時間にお手伝いに向かった。その後は、私たちの持ち込むアート製作の企画を通じた交流ができることになり、週に1回程度活動を続けてきた。明るく穏やかな利用者さんと、寛大な施設職員さんのおかげで、心温まる時間を過ごすことができた。

発足当初からSUZUを見守って下さった、俳人・花田春兆さん（以下春兆さん）と、春兆さんが入居する特別養護老人ホーム麻布慶福苑（以下慶福苑）とも交流することができた。今年は、“*No Man's Land*”観覧後の慶福苑訪問に始まり、7月の春兆さん主催イベント「第30回共に生きるみんなの歌と踊りのつどい」の観覧や8月の慶福苑夏祭りなどを通じて、つながりを持つことができた。そして嬉しいことに、秋に開催した学内展示会「白金アートミュージアム」に全面的にご協力頂けることとなった。

展示会も間近となった11月、春兆さんの作品に用いられる和紙を作らせていただくため、NPO法人

風の子会（以下風の子会）を訪ねた。春兆さんが会長を務める風の子会の皆さんは、「ひとりぼっちの障害者をなくそう」という団体のコンセプトの通り、とても明るくアットホームな雰囲気であつちを迎えてくれた。見せていただいた和紙は、原材料が牛乳パックだとは信じられないくらい本格的で綺麗だった。そして利用者の方につきっきりで教えて頂き、他愛もない会話を楽しみながら、私たちも20枚の和紙を完成することができた。

今年度ボランティアファンドチャレンジ賞を受賞したことで、11月24日～12月10日に初の学内展示会「白金アートミュージアム 丘の学園と森の特養とのアートの出会い～そして飛び入り遠囃子。昔の狸ばやしならぬ広尾の仲間たちの共鳴の出品～」を本学白金校舎パレットゾーン2階にて開催することができた（詳細は報告書80～81ページ参照）。また、展示会特別企画として俳句×写真の俳句ワークショップも行った。

表1. MG ☆ SUZU 2010年度年間スケジュール

| 【2009年秋学期】 | |
|------------|----------------------------------------------|
| 1月28日 | “No Man’s Land” 観覧 |
| 2月 | 白金の森での活動開始 |
| 【2010年春学期】 | |
| 4月～ | 月曜10:00～ / 木曜14:00～ 白金の森での活動 |
| 7月10日 | 「共に生きるみんなの歌と踊りのつどい」観覧 |
| 8月1日 | 慶福苑夏祭り |
| 8月19日 | 「借りぐらしのアリエッティ×種田陽平展」 「生きのびるためのアート日韓合同展」観覧 |
| 【2010年秋学期】 | |
| 11月6日 | 風の子会にて和紙作り |
| 11月24日 | 白金アートミュージアム |
| 11月30日 | 俳句ワークショップ開催 |

【おわりに】

振り返ってみると、2010年度はMG ☆ SUZUにとって大きなチャレンジの年であった。そして、このチャレンジを支えて下さった沢山の方々とのつながりを持てた1年でもあった。また、前年度の課題であった他プロジェクトとの協力態勢の構築という点は各種イベントを通じて大きく改善され、SUZUの活動の幅に広がりが見えた。学内展示を行った反響は大きく、終了後に色々な方からお声をかけて頂いたことは驚きであった。今後は、新しい仲間を増やし、今年出来たつながりを大切にしながらアートの輪を広げていきたい。

(心理学部心理学科2年 櫻井 仁美)

[プロジェクト報告] MG natural

【はじめに】

『MG natural』は、明学生のためのボランティア情報誌である。「ボランティアを“自然”なことにするために」、「ボランティア活動にかける思いを“ナチュラル”に伝えたい」、「学生に愛され、“自然”と手に取ってもらえるフリーペーパーを作りたい」という思いから『MG natural』と名付けられました。ボランティアを明学生に広めること、人と人、他団体との繋がりをつくることをミッションとして活動しています。

【活動報告】

2010年11月にMG natural 第4号が発行されました。今までMG naturalの記事の編集はMG naturalの代表がIN Designを使って行っていましたが、夏の研修会合宿で今後は学生スタッフがそれぞれ担当した記事を自分で編集すればいいのではないかという意見が出たため、秋学期から学生スタッフへのIN Designの講習会を行いました。

また、秋学期から生協と学生課の前にMG naturalを置いていただけることになり、より多くの明学生に手に取っていただける機会が増えました。

● MG natural 第4号の発行

2010年11月にMG natural 第4号を発行しました。第4号の内容はシロカネグローバルフェスタ2010、MG☆SUZU×こまどり社の対談企画、MG natural 探訪記、輝く★明学生、日米NPO ボランティア体験学習プログラム、ふれあい運動会の6企画で全12ページでした。元代表の須賀ゆきのさんからプロジェクトを引き継ぎ、何もかもが初めての手探り状態での制作でしたが、ボランティアセンターの方々や外部の方々のお力添えにより、なんとか形にして発行することが出来ました。

第4号はボランティアセンターと外部の繋がりに目を向け、新たな企画としてMG natural 探訪記を企画しました。MG パールのイベントであるジャングルクリスマスフェスタでお世話になっている第3世界ショップの森田千尋さん、また、元学生スタッフの葛原信太郎さんが設立したTetotE by 共有空間を訪れ、それぞれの仕事についてインタビューをさせていただきました。改めてボランティアセンターの繋がりの広さを感じるとともに、これからもこれらの繋がりを継続していけたらいいなと思います。



【反省】

2010年度の活動の反省点としてまず第1に段取りの悪さがありました。MG natural制作にあたっては企画・記事の依頼・打ち合わせ・編集・入稿といういくつかの過程がありますが、計画的に進めることが出来ていませんでした。実際にその企画を記事にするために必要な段取りや、編集作業を終了した後の最終チェック後の手直しにどれくらいかかるかなど、あらゆる事態を想定していなかったために結果として入稿が遅れてしまいました。今後はこのようなことがないように早め早めの行動を心がけて、計画的に作業を進めていきたいと思います。また、情報共有において、私が編集の作業中はそちらのほうにばかり熱中してしまい、経過などを他の学生スタッフに報告することを怠り、結果として私の個人プレーになってしまいました。今後は、学生スタッフ内での決まりであるハウレンソウ（報告・連絡・相談）を徹底し、情報がちゃんと流れるようにしたいと思います。

【今後の課題】

前年度からの課題として、まずMG naturalに関わるメンバーを増やすことがありました。しかし、一人ではメンバーを増やすためにはどうしたらいいか良い案が浮かんでこなかったのも、夏の研修合宿で参加者の皆様に意見を募ったところ、MG naturalは「ボランティアセンター発行の通信」であり、学生スタッフがボランティアセンターのことをよく知っているのだから、学生スタッフ以外の学生をメンバーとして募集するのではなく、学生スタッフがみんなでMG naturalを製作していけばいいのではないかと意見をいただきました。したがって、学生スタッフそれぞれが編集まで担当出来るようになるために、学生スタッフ全員にIn Design講習会を開いていきたいと思っています。

また、夏の研修会合宿の際に、参加者の方々からMG naturalの今後の方針や、企画についてなど、様々な意見をいただくことが出来ました。企画によっては実現が出来そうにないものもありましたが、素敵な企画案をたくさんいただいたので今後ちゃんと消化していけるように企画を詰めていきたいです。春学期（前期）は、学生スタッフで集まってMG naturalについての話し合いを行う場をとらず、メーリングリスト上で企画を募集していました。しかし、一人一人で考えるより、合宿の時のように実際にみんなで話し合いながら企画を考えた時のほうがたくさん良い企画が生まれるということがわかりました。今後は学生スタッフ内でちゃんと話し合いの機会を持ちたいと思います。

今までMG naturalはボランティアセンターの前でしか配布していませんでしたが、秋学期から生協と学生課の前にMG naturalを置いていただけることになりました。今後は、よりたくさんの明学生の方々に手にとっていただけるようになればいいなと思います。そのためにも内容をより充実させて今よりもっと良いものが出来るように努力をしていきたいと思っています。

（心理学部心理学科3年 酒井 麻里）

【プロジェクト報告】 COS 【Circle Of Shirokanaise】

【活動内容】

COS とは、“Circle Of Shirokanaise” の略で、明治学院大学のある白金という地域に根ざしたエコ活動を行っており「ゆるく・楽しく・かっこよく」大学周辺の清掃等をしている。気軽にできる活動を通して参加した学生同士のつながりを作ることが目的である。主な活動内容は以下の3つである。

1) 大学周辺の清掃活動

2) ペットボトルキャップの回収

3) COSblog の更新

*各内容の詳細は2009年度報告書28ページを参照。

【活動報告】

1) 春学期（前期）

春学期は月ごとに曜日を固定して定期清掃を行った。新規参加者もあり、メンバーも増え安定した活動ができた。6月は「昔の遊び」をテーマにイベントを行った。清掃をしながら公園に行き、童心に帰って遊ぼうという企画である。白金台にあるどんぐり公園でサッカーやキャッチボールをし、普段とは少し違った形で参加メンバー交流ができたと思う。7月に開催された「山黒（詳細は〇〇ページを参照）」が主催した白金校舎でのイベント「白金でまったり過ごす会」ではイベント参加者と一緒に白金校舎周辺でコラボ掃除を行った。このイベントでは清掃以外にも、たこ焼きパーティーやコラージュワークショップなど盛りだくさんな内容で、学内だけでなく学外の様々な立場の人と楽しく交流することができた。そして一緒に清掃活動をすることで、「山黒」のメンバーや学外の方にCOSの活動をただ知ってもらうだけでなく、COS独特ののんびりした「ゆるい」雰囲気を実際に味わってもらうことができたと思う。8月には港区リサイクル事業協同組合の方に来ていただき、たまっていたペットボトルのキャップを回収してもらった。回収を始めた2008年11月から2010年8月までに集まったキャップは200,000個以上となっている。

9月に行われた白金ボランティアセンター学生スタッフの研修合宿（詳細は29～30ページを参照）では、活動の報告、今後の計画について発表した。そこで、今まで代表が仕事を抱え込んでしまってメンバーに役割が振れていなかった状況や、活動しているもののメンバー同士の関係作りができていなかったという課題が明確化した。この合宿で他の学生スタッフからコアメンバーがそれぞれ空き時間を指定し、当日はそのメンバーがリーダーになって清掃活動を行うといった方法や、ミーティングは事務的なことだけ話すのではなく作業をしながら行うなど、今後の活動の立て直しについて様々な意見をもらった。

2) 秋学期（後期）

秋学期は各種イベントに参加したり、活動を工夫したりして充実した活動を展開することができた。

まず11月5日に高輪地区生活安全・環境美化協議会が主催した「高輪文化財周辺クリーンキャンペーン」に参加し、地域の方や地元の中学生たちと一緒に清掃活動を行った。活動を通して泉岳寺など高輪

地区にある文化財の存在を知り、よりこの地域に関心をもつことができた。また今期は白金の地域の方や白金ボランティアセンター内の他のプロジェクトメンバーとの横のつながりを作るために「種まき」と称して小学校や児童館、港区高輪地区総合支所など地域の施設に赴き、他プロジェクトのイベントの宣伝を行った。具体的には、3つのプロジェクト（山黒・SUZU・MG パール、詳細は41ページ、35ページ、33ページを参照）のメンバーと宣伝に行き、普段話す機会がなかったメンバーと一緒に活動することができた。種まきを通してCOSが他プロジェクトメンバー間をつなぐ架け橋のような存在になれるのでは、という新たな可能性を発見できた。12月からはメンバー内で仕事を役割分担するべく研修合宿で出た意見をもとに「リーダー制」を導入した。具体的にはコアメンバー内でリーダーを募り、その人が清掃活動の日時を決めて当日の活動をリードし、活動の様子をブログにアップするところまで担当することにしたのである。12月は4回実施した。その結果、どの道を通って清掃をするか決めた人や決めずに気ままに歩いた人、人が集まらず急遽工作を行った人などバリエーション豊かな活動を行うことができた。詳細はブログをご覧ください。（参照 URL：http://coscoscos.exblog.jp/）

その他、学園祭での清掃イベントやホームページのリニューアルも行った。旧ホームページは文章中心でインパクトに欠けていたため、トップページにCOSのロゴマークを大きく載せ、写真を多用してより見やすく「見たい」と思わせるページになるよう意識した。

【成果と課題】

「種まき」では他プロジェクトとのコラボができ、目的としていた学生スタッフ内の横のつながりを多少なりとも作ることもできたと思う。地域とのつながり、という面でも白金地域の様々な施設にイベントのチラシを置いていただけたので学生スタッフの活動を宣伝することができたと思う。また、高輪地区総合支所にイベントのお知らせを区のホームページに載せていただくこともできた。ただ、秋学期を通じて新規参加者が少なく、固定メンバーかつ少人数での活動が多かったことが残念な点である。参加者を増やすために、ブログの更新を頻繁に行い、ボランティアセンター前に次回の清掃日を書いたホワイトボードを設置するなど、広報面に力を入れたがその成果はまだ出ていない。活動をリーダー制にしたことでコアメンバー内の役割分担ができたので今後も継続させていきたい。

【今後の展望】

メンバーの大半が3年生のため、新メンバーの確保が急務である。まずはCOSに参加してもらいそこからコアメンバーになってもらえるような活動をするため、参加しやすい雰囲気作りや広報面での工夫、参加のきっかけとなるようなイベントを企画したいと考えている。また活動のモットーである“happy cycle,happy circle”の視点から様々な人たちとのつながりを広げ、COSの活動をさらに活発なものにするため、他団体が主催する清掃活動へ参加し、その意義や姿勢などを学んでCOSに還元したい。そして他プロジェクトとのコラボ企画も積極的に実現していきたい。

（心理学部心理学科3年本間由香、同2年佐藤ゆり）

[プロジェクト報告] 山黒

【団体紹介】

山黒とは、障がい者に関わる支援を行っている団体に関わっている学生同士のネットワークをつくることを目的に、2010年7月に白金ボランティアセンター学生スタッフのプロジェクトとして発足しました。学内のネットワークを活かし、より多くの学生や地域の人を巻き込んだ企画の立案や実施を行い、新たな人と人とのつながりを生みだしていくことを目指しています。



【活動報告】

(1) 白金でまったり過ごす会

[概要]：7月31日（土）に白金にあるNPO法人トータルヒューマンネット21「グループホームレインボー白金（以下、レインボー白金）」の利用者とスタッフ、地域住民、明学生が交流する場を作ることを目的とし「白金でまったり過ごす会」を開催しました。当日の参加者は約30名。イベントは全員でたこ焼き機を囲んでのたこ焼きパーティー、COS（報告書__ページ参照）とのコラボレーションイベントとして白金の街を歩きながらのゴミ拾い、そして新聞や雑誌を手で破り大きな紙に好きなように貼りつけていくコラージュアートづくりを行いました。



[成果と反省]：明治学院大学とレインボー白金は同じ地域にあるにもかかわらず、今まで両者はほとんど関わる機会がありませんでした。白金でまったり過ごす会を実施することでレインボー白金の利用者にとって大学へ足を運ぶきっかけをつくることができました。山黒にとっては、地域との関係性づくり、他のプロジェクトとのコラボレーション企画の可能性を探るなど、今後につながるイベントとなりました。反省としましては、学生同士で固まってしまう、外部の方々と交流できなかったということ、当日参加のボランティアとの情報共有ができていなかったためスムーズに動けなかったことの2点が挙げられました。人と人とのつながりを第一に考える山黒にとって、当事者と学生が交流しやすいような仕組みをつくっていくことがつねに必要なと感じました。

(2) ぱれ☆コレ2010～融合と発見～

[概要]：11月28日（日）にNPO法人ぱれっとが主催し、NPO法人クーピーファッションアートグループ、明治学院大学ボランティアセンターが共催する形で企画された、障がいのある人もない人もともに楽しむことのできるファッションショー・ぱれ☆コレ2010～融合と発見～（以下、ぱれコレ）に山黒がチームを結成し参加しました。このイベントの特徴は、障がいのある人とない人が1つのチームを作

り、数回にわたるワークショップを通して、チームごとに特色を出したパフォーマンスをつくり上げていくプロセスにあります。山黒チームは明学生のほか、プロのデザイナー、留学生や他大学の学生、そしてレインボー白金という、白金にあるグループホームの関係者で構成されました。私たち山黒も「障がい者」「福祉」という枠にとらわれず、様々な方たちと融合し、互いに学びあい、日々の変化を楽しみながらショーをつくり上げました。

本番当日の山黒チームは「ちょいわりーゼ白金」をテーマにレインボー白金の利用者と学生の14人がモデルとして出演しました。学生とレインボー白金の利用者がペアとなりギャング、ロリータ、パリジャン&パリジェンヌ、グループサウンズ、ウェスタン、水戸黄門といったイメージをもとにパフォーマンスを披露しました。

[成果と反省]：当日は関係者を含めると来場者は300人近く集まりました。モデルとなったメンバーは自由で個性的なパフォーマンスを披露し、会場は感動の渦に包まれました。当日のパフォーマンスも然ることながら。このぱれコレの一番の成果は、プロセスの中でつくり上げた関係性にあると思います。ぱれコレの目的はファッションショーという多くの人が興味をもつ媒体を通じて、日常では生まれにくいような出会いの場を作るということでした。実際に山黒チームには、福祉には全く関心がなかった学生が関わりましたが、障害をもった方と向き合うことで、新たな気づきや発見が生まれるきっかけになったという声を多く聞くことができました。一緒に楽しみ、ときには悩みながら衣装やパフォーマンスを作るというプロセスを通じて、障がいのあるなしに関係なく共感し合えるような関係を築くことができました。また、ぱれコレを通じて、活動に興味をもってもらえる学生が増えました。これらのつながりは次回につながる大きな成果でありました。反省としましては、目の前のことに追われてしまい、進行状況の把握が物や情報の管理が甘かった点が挙げられます。先にことをシミレーションし、全てのことを組み立てて考える力をつけていくことが今後の山黒メンバーの課題であります。

【今後の方針】

昨年度は、ぱれコレの準備に追われてしまい、正式な山黒メンバーが確定していません。まずはメンバーを再募集し新制山黒を結成することから始めたいと思います。半年間でつくり上げた新たなつながりを活かし、学生らしいオリジナリティのある企画を考えていきたいと思います。福祉に全く関わったことのない学生を巻き込めるイベントとして間口が広く、交流の生まれやすい仕組みづくりを忘れないで活動していきたいです。また、企画・立案だけではなく山黒メンバーが日常で関わっているそれぞれの団体で抱えている問題を共有し、共に解決方法を考えられるような環境づくりをしていきたいと考えています。

(経済学部国際経営学科4年 黒澤友貴)

[卒業学年報告] 4年間を振り返って～私とボラセンの変化～

ボランティアセンター（以下ボラセン）にはじめて足を踏み入れたのは、大学1年生の時。入学式後の学校説明の中で、ボラセンと学生スタッフの存在を知り、大学生になったら新しいことにチャレンジしようと思っていた私は、単純に「面白そう」と思い、ボラセン学生スタッフ（以下学生スタッフ）になった。この時、学生スタッフとしての活動が私の中で大きなものとなろうとは考えてもみなかった。

1年生の頃は、活動に参加していたものの、「学生スタッフって何をやっているの?」と友達に聞かれても、曖昧な答えしかできなかった。大学生生活に慣れた2年の春、活動をせず、ただ籍を置くことに違和感を覚えはじめた。「自分は何がしたいのだろう」、そう思った時、ある先輩が白金地域の活動に誘ってくれた。それがボラセンでの活動を変えるきっかけとなり、白金地域でのお祭りの企画・運営、MGパールの活動や施設でのボランティアなど積極的に参加した。“自ら”考え、動くことの大切さを学び、色んなことを経験したくて、がむしゃらに活動していた。その中で様々な人と出会い、多くのことを学んだ。それを多くの人に伝えたくて2年生の秋、ボランティア情報誌「MG natural」を創刊した。インタビューでボランティアにかける熱い想いを聞いて刺激を受け、人にものごとを伝える難しさも経験した。2年の終わりからはチーフを引き継ぎ、しろかねサラダとMG naturalの代表をさせてもらうなど、ただ単に活動するだけではなく、マネジメントし、まとめる立場となった。責任も増えたがやりがいも感じたし、何よりスタッフ1人1人が自分のやるべきことを自覚して活動に励んでいたのも、代表であることをプレッシャーに感じることなく、自分らしく活動に参加できた。4年生の後半はあまり活動に参加できなかったことが心残りではあるが、学生スタッフとして活動した4年間はとても充実していた。以上のように私は学生スタッフとして変化してきたが、学生スタッフという団体もこの4年間で大きく変化してきた。私が1年生の頃と4年生の頃では学生スタッフ1人1人の意識も活動内容も活気も全く違う。しかし、これは簡単にできたのではなく、卒業した先輩や李さんをはじめ白金ボラセンのスタッフ皆で苦勞して作り上げた結晶である。私自身もその苦勞をしてきた分、その結晶をゴールとはせずさらに大きなものにしよう頑張っている後輩たちを見ていると、昔の苦勞も吹き飛ばすほど嬉しくなる。私が学生スタッフとなり、得たもの。それは良き仲間である。活動は楽しいことばかりではなく、時には辛いこともあったが、相談に乗ってくれ、助けてくれる仲間がいた。そして刺激し合い、切磋琢磨しながら互いを高め合える仲間がいた。そんな仲間が大勢できたことは、私が学生スタッフになって得た大きな財産である。そして、「“自ら”考え、行動すること」の大切さを学べたことも大きかった。受け身がちだった1年生の時の私は、どこかつまらなさを感じていたのだと思う。しかし、自分で行動することの大切さを知り、実際に行動にすることで視野も世界も広がった。ここで学んだことは社会に出て生かし、色んなことに挑戦していきたい。最後にボランティアセンターの職員の方々、大切な仲間、そして地域の方や関わって下さった沢山の方に感謝を述べたい。社会に出てボラセンで学んだ“謙虚さ”と“素直さ”を忘れず、大きく成長できるよう頑張っていきたい。 (心理学科4年 須賀ゆきの)

[卒業学年報告] ～山黒の黒～

私が学生スタッフになったのは大学4年の6月と比較的遅い時期であった。もともとNPO法人ぱれっと（以下ぱれっと）でインターンシップを行っていたため、ボランティアという言葉は自分にとって身近なものではあった。ただ、明学ボランティアセンターのことはほとんど知らなかった。たまたま足を運んだときに、コーディネーターの李さんが語る「学生スタッフ」というものになぜだかわからないが強く惹かれたのを覚えている。勢いで学生スタッフになり、NPO法人トータルヒューマンネット21「グループホームレインボー白金」（以下レインボー白金）でボランティアをしている山本さんと出会い、「山黒」を立ち上げることになった。そして、山黒を結成してから1カ月も立たないうちに、ファッションショー「ぱれ☆コレ2010（以下ぱれコレ）」の話が持ち上がった[山黒報告参照]。学生スタッフになる前は、すでにあるボランティア活動に乗っかるだけの現状に物足りなさを感じており、自分が主体となって作っていきることが楽しみであった。

しかし、イベント準備が始まり、200人規模のファッションショーを他団体と協働で地域を巻き込みながら行うということは予想していた以上に大変だった。自分がどの立場に関わるべきなのかが見定められない、情報共有がうまくいかず仕事を一人で抱え込んでしまうなど当初考えていたように進まない葛藤にいつも悩まされ、問題の原因は自分自身にあるのに、周りのせいにしてしまうときも何度かあった。しかし、いつも悩んでいる自分の支えになってくれる頼もしい仲間がボラセンにはいた。みんなからの声かけがボランティアセンター、学生スタッフ、山黒メンバーという心強いつながりのなかに自分があることをいつも思いださせてくれた。このつながりが、自分たちが主体となってつくっていく学生スタッフの醍醐味なのだと感じた。ぱれコレをつくり上げるなかで、いつのまにかボラセンが自分にとっての居場所となっていた。学生スタッフになって僅か半年間であったが、ボラセンで出会ったこの仲間とのつながりは、自分にとって一生の財産になると思う。山黒には、他の関わっている団体よりも愛着をもつようになっていたし、愛着をもつになるにつれて、活動にやりがいを感じるようになっていった。就職活動の最中であつたにも関わらず、あつたとき勢いで学生スタッフになって本当によかつたと思っている。学生スタッフにならなかつたら、苦しい思いもせず、自分の好き勝手に時間を使っていたのかしれないけれど、その分今のような出会いもなかつただろうし、成長もできなかつたのではないかと思う。

最後に、いつも失敗してばかりの自分に場数を踏む機会をつくってくださった、ぱれっと、レインボー白金、山黒メンバー、ボランティアセンター職員の皆様、本当にありがとうございました。この半年間は自分の甘さに気づかされることばかりでしたが、活動のなかで学生スタッフの大切にしている「責任と自覚」という言葉の意味や重さを何度も再確認することができました。まだまだ未熟な自分ではありますが、ボラセンで得た貴重な経験を社会人になってからも実践の場で活かし続けていきたいと思つています。

（経済学部国際経営学科4年 黒澤友貴）

[卒業学年報告] こんなはずじゃなかった!!

大学卒業を間近に控え、ふとその4年間を振り返ると、ボランティアセンターでの日々がまず思い出され、それと同時に数々の「こんなはずではなかった!」というエピソードが蘇る。そもそも、ボランティアセンターの学生スタッフになったことが、1番の「こんなはずではなかった!」である。

私がボランティアを最初に行ったのは、大学1年の秋、高齢者施設内の喫茶スペースでの活動だ。そのご縁でボランティアセンターとの関わりを持たせて頂くことになるのだが、それをきっかけに、気がつけば自分のやる気に火がつき、2年の春、MG ☆ SUZU (35 ページ参照) を立ち上げ、学生スタッフに登録、ボランティアファンド学生チャレンジ賞 (71 ページ参照、通称「ボラチャレ」) に応募、助成が決定した。ここに至るまで、本当にあつという間であった。物事に対し、積極的とは言い難い自分にとって、団体を立ち上げたり、審査員を前にプレゼンテーションをするボラチャレの審査会など、出来れば避けて通りたいような出来事ばかりだったので、あのころ私が思い描いていた大学生活とは全く違う、自分には少し背伸びをしていたような日々であったように思う。そのお陰で、今までの自分より成長できた。特に、学生スタッフの研修会や、ボラチャレの報告会、新メンバー獲得のための説明会など、人前で発表する機会が多かったため、「人に伝える力」を鍛えられた気がする。自分以外の方が話している姿を見て刺激を受けたり、SUZU の活動を進めていく中でいかにその魅力を伝えられるかを考えていく中で、まだまだ未熟ではあるが、そこは成長出来た部分であり、またその大切さを知ることが出来た。

最初はメンバーが私ひとりの MG ☆ SUZU だったが、1年間で4人になり、今では二桁になった。私が3年の時に行った展示会をもって代が替わり、今年、秋、念願だった学内展示「白金アートミュージアム」(80 ページ参照) が開催された。展示会を観に行った時は、新しくなった SUZU の姿を見たようで、何とも言えない思いがこみ上げてきた。後輩たちの努力、施設の利用者の方々や職員の皆さま、ボランティアセンターの職員・学生スタッフの皆さまなど、本当に多くの力が SUZU を支えてくださって、そしてあの SUZU が今も存在しその上大きくなっていて、設立当時の私には想像出来ないまさに「こんなはずではなかった」である。考えてみれば、私はいつも多くの方に支えられていた。よく、1人で SUZU を作ったということに「すごいね。」と驚いてくださる方もいるが、立ち上げたときも本当に1人だったことは1度もない。ボランティアセンターの職員の方々をはじめ、学生スタッフの先輩や同学年の友達などが、いつも力を貸してくれた。ボランティアセンターは、どんなに落ち込んでいても、行けばまた何でも出来そうな気になれる、不思議な力があつた。その不思議な力に支えられ、幾度となくぶち当たった壁を一緒に乗り越えてきたかけがえのないメンバーや、さらに SUZU を成長させてくれた素晴らしい後輩など、私は多くの出会いを得ることが出来た。これほど中身の濃い経験をする事になるとは、「こんなはずじゃなかった!」な4年間であり、これを糧に今後も成長していきたい。

最後に、今まで支えて下さったボランティアセンター職員の皆さまを始め、多くの方々に感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。 (社会学部社会福祉学科4年 依田ツカサ)

[卒業学年報告] 小さなきっかけから大きな宝物

私は2年生からMG☆SUZUのメンバーとして活動してきた。きっかけはほんの小さなこと。授業中に配られた勧誘チラシを受け取ったことが始まりだった。チラシに書いてある説明会、行こうかな、でもちょっと面倒くさいからやめようかな、と悩んだ末、行くだけ行ってみようと踏み出した一歩から全ては始まった。踏み出して良かったと今心から思う。現在メンバーは10人以上だが、当時は3人しかおらず、私が4人目のメンバーとなった。心細いスタートだったが、そこから紆余曲折を経て現在のSUZUができあがり、私は学生スタッフにもなり、大きな宝物に出会うことができた。

宝物その1.「仲間」…SUZUメンバーはもちろんのこと、他のプロジェクトで活動している魅力的な学生スタッフにも会うことができた。皆が黙りこくった話し合いの場できちんと自分の意見を言える人、ゴミが散乱した中で手が汚れるのも構わずさっと動いて拾える人、会うたびに満面の笑みを浮かべてくれる人、皆の知らないところで地道な努力を続けてくれた人、たくさん学ぶことがあった。素敵な仲間がたくさんいた。私はこんな仲間と卒業後もずっとずっとつながっていたい。

宝物その2.「福祉の勉強」…特別養護老人ホームで活動する中で、高齢者の方や施設職員の方と関わってきた。相手の立場に立って行動すること、手を握ること、笑うこと、一緒に喜ぶこと、一緒に楽しむこと、「心」について本当に多くのことを学ばせていただいた。そして、どんな施設が利用者さんとご家族にとって幸せなのか、福祉職で働くってどんなことなのか、失敗と反省を繰り返しながら私なりに勉強することができた。本当に感謝している。

宝物は他にも挙げればキリがないけれど、大きく2つを挙げた。きらきらした思い出を、本当にありがとうございます。

いつも温かくサポートし、学生の成長を見守って下さったボラセン職員の方々、私にたくさんの刺激と笑顔をくれたSUZUと学生スタッフの仲間たち、福祉って何なのか考えさせて下さった施設職員の方々、どうもありがとうございました。SUZUとして、また学生スタッフとして活動できたことは、私の大切な宝物です。



学内展示の様子（みんな忙しくて全員揃わず）

展示会の打ち上げの様子（OB・OGも参加）



（社会学部社会福祉学科4年 小平愛実）